
しのんでないけどしのんでる

えつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しのでないけどしのんでる

【Nコード】

N0496Z

【作者名】

えつ

【あらすじ】

「安土城に忍びこんで織田信長の私物を一つ盗んでくること。特にフンドシにはボーナスがつきます」それが忍びの里の卒業試験。できるだけ卑怯で姑息な手段を使ってライバルたちをなぎ倒しましょう。時代考証とかいろいろ適当です。HPにも掲載しています。

MISSION 1「城門を突破せよ！」

「安土城に忍びこんで信長の私物を一つ盗んでくること。特にフンドシにはボーナスがつきます」

これを忍びの里の卒業試験とする。

早朝の青空の下。

教師の言葉に卒業生たちはざわめきたった。

「ボーナスって現金ですか？」

「金ではありませんが、いざ大金がもらえるようになります」

「どうやって信長の私物だと鑑定するんですか？」

「企業秘密ですが、できるだけ自分たちで証拠をそろえるようにしたほうが卒業後の就職率がアップするかもしれません」

「バナナはおやつに入りますか？」

「土でも食ってろ」

「信長の物であればなんでもいいんですか？」

「なんでもいいです。ただし、入手困難なものほど高得点なのはいうまでもありません。なお、殺されようが捕まろうがこちらは一切責任をとらないし助けにも行かないのでそのつもりで。できなかつたら留年です。特におめおめと手ぶらで帰ってきたものは公開処刑します」

「ヒイイ……！」

「鬼！」

「人でなし！」

悪魔とクラスメイトたちの会話を聞きながら、小太郎はぼうつとつつたっていた。

おそらく、ボーナスは大国への就職斡旋だろう。平凡な出来であると自負する小太郎は、高望みする気がない。田舎の小国が小金もちにでもつかえられればそれでいい。したがってフンドシには手を出さず、手堅く信長の将棋のコマでも狙うのがいいだろう。そうし

よう。

一人侵入プランを立てていたら、

「欠席者は二人だけなのにだれかたりないと思ったら、こんな所にいたんですか」

教師がこちらにやってきた。

「出欠なら、さっき名前を呼ばれたときに返事したはずですが」

「あなたの声、特徴がなさすぎて印象に残らないんですよ。顔も名前も平凡だし、体型も中肉中背で性格もありきたりだからほんと記憶に残らなくて」

「いじめでしょうか？」

「いいえ、褒めてます。忍者は目立ってはいけない。あなたのそのありえない存在感のなさは貴重なものです。きっと優れた忍になれることでしょう。期待していますよ」

「先生……」

優しいこともいえたんですね。初めて知りました。

「で、名前なんでしたっけ？」

「小太郎です」

忍びの里を出て二時間ほど。

安土城に到着し、小太郎は近くの木の上に身をひそめた。

基本的には黒い忍び装束で夜間に活動するのだが、今は昼間なのでまっ白な忍び装束に身を包んでいる。草や土で適度に汚れているが目立たなくていい感じ。そのかいあってか頭に鳥の巣を構築されつつあった。

目の前には堅牢な城がそびえ立っている。

見はりの数も多く、侵入するだけで骨が折れそうだ。どうしたものかと頭をひねっていたら、武士が門へ近づいていった。

「まで！ 見ない顔だな。名を名乗れ！」

左右に立つ二人の門番が槍をクロスさせ、道をふさぐ。

「拙者、本日より城に仕官することになった小早川一衛門でござる」
「おや、どこかで聞いた声だ。」

「ならん！ 今日はいずれも通すなと殿からのお達しだ！ 後日出な
おせ！」

「ちいつ、バレたか！」

なんと、クラスメイトが武士に変装していたらしい。

武士はぱつと服をぬぐと元の忍び装束にもどり、ぬいだ服を門番
たちに投げつけて城内へ走った。

「侵入者だ！ であえ、であえーっ！」

ずどどどどどどど、という地響きとともに城内から大量の武
士が駆けつけ、クラスメイトを追っていった。後には盛大な砂ぼこ
りと、元通りいずまいを正す門番たちが残る。まだ入り口なのに、
ここはなかなかの難所のようなのだ。

壁をよじ登って侵入したほうが楽かもしれないな、と固唾を飲ん
でいたら、

「あれ、小太郎くん？」

いきなり下から声をかけられ、とつさに木から飛びおりて相手を
羽交い絞めにし、小太刀をつきつけてしまった。が、それは素早く
外され、あつという間に背負い投げをくらう。

地面にたたきつけられてのびていたら、笑いながら顔をのぞきこ
まれる。

「ひどいなあ。ちゃんと名前を呼んだのに、攻撃するなんて」

すずやかな切れ長の瞳。

さらりとなびく黒髪を後ろにまとめ、頭巾の中に押しこんでいる。
細い体は黒い忍び装束に包まれていた。

「あ、すまない。半蔵だったのか」

いかつい名前だが、だれもがふり返るほど華やかな美少女だ。

こちらでクラスメイトで、歳は同じ14。小太郎の気配を感じと
れるレアな友人である。でもって成績も非常に優秀である。昼間で

黒い忍び装束は目立つと思うのだが、「白なんかダサイからやだ」とのことで、彼女は白を着たことがない。そういえば、同じ意見なのか、はたまたわざわざ白を買うのが面倒なのかはわからないが他のクラスメイトも白は着ない。便利なのに。

「正面から侵入するのは難しそうだぞ」

「どうして？」

さっきの光景を話すと、半蔵は整った顔でさわやかに笑った。

「小太郎くんなら大丈夫だよ。ほら、お先にどうぞ！」

んなわけあるか。忍び装束で城門へ進んだりしたらたたき出されるに決まっている。

抵抗したが、城門までどーんと思いきりつき飛ばされてしまった。

「く……っ！」

こうなったら力技で突破するしかない。

小太刀をかまえ、違和感に気づく。

忍び装束のうさん臭い少年が目の前に立っているというのに、門番たちがまったく警戒していないのだ。

「え？」

つい声を出すと、門番の一人がこちらを……いや、こちらを通りこして背後にいるもう一人の門番に視線をむけた。

「今なにかいったか？」

「いや、なにも。今日はいそがしくなりそうだな」

「まったくだ」

こいつら、俺に気づいてない。

人に話しかけても無視されたり、手裏剣が自分の分だけ支給されていなかったり、自分の机を指さされ、「この席の人っていつくるの？」などと目の前で聞かれたことはあったが、まさかこれほどまどとは思わなかった。

「……」

にわかに精神的ダメージをくらいつつ、小太郎は余裕で城門を突破した。

バレぬなら、バレるまでやつちまえホトトギス。

それから小太郎は怒涛の開き直りを見せた。

城内でフラメンコを踊りながら女中とすれ違い、見回りする侍の頭からカツラを奪って床に置いてみたり、障子にでかでかと墨で落書きしたりした。

すべてスルーされた。

五分間ほど廊下のまん中で体育座りをしてすすり泣いたが、だれもなぐさめてくれないどころか侍女に蹴られ、「あら、ネコでもいたかしら？」とかつぶやかれてやめた。今は廊下の端にいる。

「なにをしてるんだい君は」

いつから見ていたのか、天井の板を外して半蔵が逆さまの顔をのぞかせる。

「半蔵。俺は裸で歩いてもだれにも騒がれないような気がしてきた」

「うらやましいよ。それより、君に頼みがある」

どうやら忍びの里の卒業生が侵入してくるとバレているようで、信長の私物が一箇所に集められ、嚴重に警備されている。

半蔵がその警備網を突破するのはたやすいが、問題は他のクラスメイトたちだ。城内にうじゃうじゃひそんでいる気配がするが、姿が見えない。みはりを倒している間に獲物を横どりされたり、倒した瞬間になだれこんできて獲物争奪戦になるのが心配らしい。

「もちろん勝つ自信はあるけど、卒業生は40人いるからね。何個かとり逃げされる危険がある」

「試験は1個もって帰ればいいんだろう？ 別に少しくらいとられても」

「小太郎くんは欲がないねえ。私はファンドシ狙いなんだ。アレをとられちゃ困る……そういうわけで、その部屋を教えてあげるからファンドシとってきてくれない？」

「別にかまわんが」

二つ返事でうなずいて、その場所へむかった。

その部屋は入り口が三つもあり、どこにも見はりが二人ずつ立っていたが小太郎は彼らを素通りして普通に中へ入った。

中には信長の私物がどっさりと山積みになれ、二人の侍が口論している。

「えーい、勤務中に菓子を食うんじゃない！」

一人はクマ男、という感じの筋肉ダルマ。

相撲とりのような巨体で、素手だけで十分な攻撃力をもっている。うだ。

「えー、意味わかんないんすけど。まだだれも侵入者きてないし、まつだけなら菓子食いながらも問題ないじゃないですかー」

もう一人は二十歳そこそこ。背は高いが優男で、長い髪を一つに結わえている。この城にいる武士はみんな正服であるかみしもと長着を着ているのだが、この男だけは普段着のままだった。

「ばかもん！ 集中力が削がれるだろうが！ だいいち甘い菓子など……せめて塩にぎりにせんか！」

「ジジイの偏見うぜー」

優男がクマの口に和菓子をつっこむ。

小太郎はその横をすりぬけ、ガサゴソとフンドシを探していた。

だが、ない。

どこにも見当たらない。困って天井を見上げると、小声で半蔵がたずねた。

「どうしたの？」

「フンドシがない。ボーナス特典だし、違う部屋にあるのかもしれない」

しかたなく茶器を二つもって部屋を出ようとした、そのとき。

「へっくしー！」

うっかりくしゃみが出てしまった。

「うわ、曲者！」

「であえ、であえいー！ 賊がきよつたぞー！」

のんきに甘党と辛党について議論をかわしていた侍二人が小太郎に気づき、抜刀して襲いかかってくる。

気づいてもらえた嬉しさに涙ぐみそうになって、つい反応が遅れてしまった。とつさに後方へ飛んだものの、右手に刃が届きそうだ。あわや血を見るかと思ったが、とつぜん侍たちがぐにやりとへたりこんで失神した。

「気をつけてね。高レベルの者ほど君の気配を察知しやすいんだから」

半蔵が吹き矢で二人を仕留めたらしい。

「賊はどこだー！？」

「曲者だと！？」

「命知らずな！」

三つの入口でそれぞれみはりをしていた侍たちが六人、同時に戸を開けて押し入ってくる。

半蔵の吹き矢で二人倒し、残り四人は小太郎がみね打ちで気絶させた。

ひらりと天井裏からおりて吹き矢をしまうと、信長の茶器を一つ受けとつて彼女はいった。

「さあ行こう、信長を探しに」

「俺も君も信長の私物を一つずつ手に入れたことだし、信長を探す必要は……」

「なにいつてんの、これは保険にすぎないよ。私の狙いはファンドシ。そしてファンドシがここにないということは、きっと信長自身が装備しているに違いないよ」

ファンドシ連呼する美少女ってなんかヤダなあ。

しかもぬぎたてホカホカを狙っているというのだから、「おまえは一体どこへ行こうとしているんだ」と問いたくなってしまう。出世と大金に目がくらんでいるのかもしれないが、目を覚ませといいたい。いえない。

「あれ？ その顔、もしかして手伝ってくれないつもりなの小太郎くん。たった今助けてあげたのに」

大して身長は変わらないのに、わざと少しかがんで上目づかいで顔を近づけてくる。うるんだ瞳は愛らしいが、あいにく小太郎は長いつき合いで免疫ができている。

「忍び同士で色じかけが効くか」

「おや残念」

けるっとして半蔵がはなれる。

「だが借りは返すよ。友達だしな」

「そうこなくちゃ」

半蔵はにっこりと満足そうに笑って再び天井裏へひっこんだ。

ほぼ同時に、外にひそんでいた大量のクラスメイト達が室内へ押しよせてくる。彼らによって信長の私物争奪戦が繰り広げられたが、小太郎はやはりだれにも気づかれず、無傷でその場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0496z/>

しのんでないけどしのんでる

2011年12月1日22時52分発行